

[Research Paper]

大学博物館に期待される新たな役割 —地域社会と大学との「ハブ」として—

田邊奈々瀬・横島公司

はじめに

日本の私立学校の改革と発展には、建学の精神を常に意識しながら、歴史的教訓を読み取り、現代に生かすという視点が不可欠である。そして建学の精神とは、母校の歴史（以下、自校史）の明確な理解によってはじめて裏付けられるべきものである。そのため、個々人の記憶や経験に基づく主観（思い入れや偏見）、あるいは「お国（=大学）自慢」といったバイアスを注意深く排しつつ、自らの大学の歩みを、資料に基づき批判的に検討し、研究的な視点で年史を叙述していくことが非常に重要である。

ユニバーシティ・アイデンティティ（以下、UIと記す）の確立が重要視され、一定の社会的評価を得ている主要大学（慶應・早稲田・明治・立教、青山学院、関西学院、同志社など）において、かつての「記念事業の引き出物」ではなく、専門の研究者が自らの大学の歴史を批判的に総括した研究的視点を盛り込んだ大学史編纂が、すでに一般的となっている。史実を受けとめ、その後の教訓とするためには「引き出物」では教訓足りえないためである。

また一方で、私立大学にとって極めて重要な、大学構成員（教職員、学生、卒業生）の自校に対する誇り、愛情、帰属意識といった「アイデンティティ」の形成もまた、こうした大学の歴史の正しい理解なくしては成り立ち得ないことを指摘しておく必要がある。

近年、大学は「ホームカミングデー」を設け、そこで積極的な大学史の公開展示を行っているが、これを単純な「旧交を暖めあう場」としてのみ捉えるのはあまりに皮相的であろう。OB・OGが母校を訪問し、大学の歴史を確認する行為は、母校への帰属意識=愛校心を改めて確認する行為

でもあるためである。自校を愛する OB・OG が、自らの子女を再び母校に通わせたいと願う、その気持ちは自然である。事実、そうした循環によって日本の私立大学が成長していったことは論を俟たない。すなわち大学が不断の改革と発展を遂げるため、自校史は重要な役割を果たしており、その重要性に気づいた上記の大学は、自校史の叙述を一過性ではなく継続的な営みとして続けている。そしてそのために活用された「装置」が、大学におけるミュージアム（博物館、文書館、展示館など）であった。こうした事例が示すように、これからの大学ミュージアムは、多様化する地域と大学構成員と住民の記憶をつなぐ「ハブ」的な役割を持つことが強く期待されているのである。

本稿では、札幌市豊平区（主に西岡、福住、澄川、平岸、月寒など）の発展とともに歩んできた札幌大学と市民との貴重な窓口の一つとして長きに渡り貢献してきた埋蔵文化財展示室の活動を踏まえながら、大学博物館が大学史の公開展示という試みを通して、地域社会に対し、どのような貢献が新たにできるか、その可能性をあきらかにしてみたい。

1. 札幌大学埋蔵文化財展示室のあゆみと活動

札幌大学内に埋蔵文化財展示室（以下、展示室）が開設¹⁾されたのは、1988（昭和 63）年のことである。その間、2009（平成 21）年の施設移転をはじめ、幾度かの組織的変遷を経ながら、今年度（2016 年）で 28 年目の歳月を迎えようとしている。

これまで展示室が行ってきた活動は、大きく①展示公開、②教育普及活動、③資料の調査研究の三つに分けられる。

うち①および②については、基本的な展示方針として、大学が所蔵する各種の考古学資料²⁾を用いながら北海道の先史～アイヌ文化期に至るまでの歴史段階を解説した「北海道の通史展示」を基軸としたうえで、時に大学の学芸員課程と連携しながら、企画型の展示などを行うといった幅広い活動を展開している（図 1～3 参照）。とくに後者については、展示室の施設設置の理念として学生にとってはもちろん、市民にとって「益」と

なる活動・展示を行うことが挙げられている点はもちろん、大学の教員（ゼミナール）等が長きにわたって収集・集積してきた研究成果を、広く市民に還元することが、札幌大学が「開かれた大学」であり続けるために必要な試みであるからに他ならない。

なお博物館とは「社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、研究、教育、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示をおこなう公衆に開かれた非営利の常設機関」³⁾と定義されている。なお、展示室はいわゆる博物館類似施設⁴⁾であるため、法的な意味で博物館であり続ける義務は負っていない。しかしこうした定義を「指針」として位置付けた上で、日々の活動を行っている事を予め明記しておく。

2. 企画展示について

展示室主催の企画展示のテーマ設定は基本的に前年度、大学のイベントや新収蔵資料を加味して決定している。2008年以降に行われた展示公開を表1にまとめた。

表1 展示一覧

種類	期間	テーマ	内容
企画展	2011.1.14～10.31	チライベツ遺跡展 —擦文文化集落跡—	過去の調査によって明らかになった12軒の住居跡から集落形成を紐解く
博物館実習	2011.1.14～10.31	旧教科書への誘い	寄贈された昭和の教科書から当時の小学校教育を振り返る
企画展	2011.3～5月	札大の春	春に校内で見られる植物の紹介と写真展示
企画展	2011.6.17～30	博物館実習の軌跡～土器とうさぎと自然と僕～	博物館資料の撮影方法の紹介、および札大を被写体にした学生の写真展
画像・動画展	2011.9～11月	発掘調査成果展 えさしの自然と遺跡の調査	枝幸町における調査成果の速報
博物館実習	2012.1.28～5.31	～知の巨人～山口昌男	山口昌男の業績を氏が収集した民族資料とともに紹介。コレクションの整理事業も併行
企画展	2012.6.30～11.10	自然観察のすすめ	大学用地内の植生の紹介および自然観察の楽しさを提案

企画展	2012.7.7～8.5	博物館実習写真展～さ れど心は子供の如く～	博物館資料の撮影方法の紹介、お よび札大を被写体にした学生の写真展
企画展	2012.10.7～ 2013.2.9	自然観察のすすめその 2「サツダイのきのこ」 展	本学で夏～秋にみられる茸の展示 と分布から、自然界における菌類 の働きをみる
博物館実習	2013.1.25～7.31	遊ぶ道化～仮面・おも ちゃ～	前年に続き山口が収集した資料のう ち道化に関する仮面や玩具の展示
企画展	2013.3.22～7.4	札幌大学開学50年史成 果還元事業展	本学開学期の動き、変化を紹介
企画展	2013.7.26～9.29	博物館実習写真展 The Undeveloped Photograph	博物館資料の撮影方法の紹介、お よび札大を被写体にした学生の写 真展
画像・ 動画展	2013. 9～11月	発掘調査成果展 枝幸 町ウスタイベ堅穴群測 量調査2011	枝幸町における調査成果の速報展
博物館実習	2014.1.25～4.25	北海道より北の大地～ 樺太の呼び声～	樺太の歴史、国境標石レプリカや 拓本を展示
企画展	2014.2.13～3.31	山口昌男と遊ぶ@札幌 大学	山口昌男一周忌特別展
巡回展	2014.5.12～7.19	樺太一知られざる北の 国境	道北地区博物館等連絡協議会巡回 展
企画展	2014.7.22～10.5	博物館実習写真展15人 のカメラマンたち	博物館資料の撮影方法の紹介、お よび札大を被写体にした学生の写真展
博物館実習	2015.1.24～4.28	彷徨する学者と歩く世 界—山口昌男が愛した アーティストたち	山口の版画コレクションを中心に、 氏の芸術への視点を探る
企画展	2015.6.13～8.8	オホーツクの灯り—安 部洋子原画展	樺太での暮らしを描いたイラスト と詩、写真の展示
企画展	2015.12.9～ 2016.2.9	企画展「水木しげるの 漫画から入門する妖怪 学」(図書館)	図書館との連携事業
博物館実習	2016.1.23～4.30	手づくりの記憶 —新収蔵資料展	新たに寄贈された資料の紹介
ミニ展	2015年から継続	ミニ廊下展	展示室または教員のお室を展示解説 2～4ヶ月で交換

展示室における常設展示利用者数は、年間 1,500 人前後と推計されてい
る⁵⁾(表2参照)。

2010～15年における月別利用者数を記録したのが表3～5である。2014
～15年度を例に利用者推移と開催イベントをまとめた表6・7を見ると、企

画展の開催によって（5・7月の）入場者数に大幅な差が生じ、年間利用者の総数に変動がみられることがわかる。

本来ならば、魅力ある常設展示を用意して利用いただくというありようが望ましいのだが、しかし企画展を開催しないと人が集まらない（＝常設展示の利用も促されない）という日本の博物館が抱えるジレンマ⁶⁾が、展示室においても明瞭に現れているのである。

もちろん入館者数を意識しすぎると、社会教育施設としての本質を忘れ、単なる「数字を稼ぐためのイベント」会場に墮してしまう懸念もあるため、この辺りのバランスは難しい。だが企画展のコンスタントな開催が地域の方々に足を運ばせる大きな動機となることは確かである。悩ましい課題であるが、今後も改善に努めたい（図4～8参照）。



図1 展示室風景 常設展示（2010年）



図2 展示室風景 常設展示（2013年）



図3 展示室風景 常設展示（2016年）

表2 入室者年度別推移

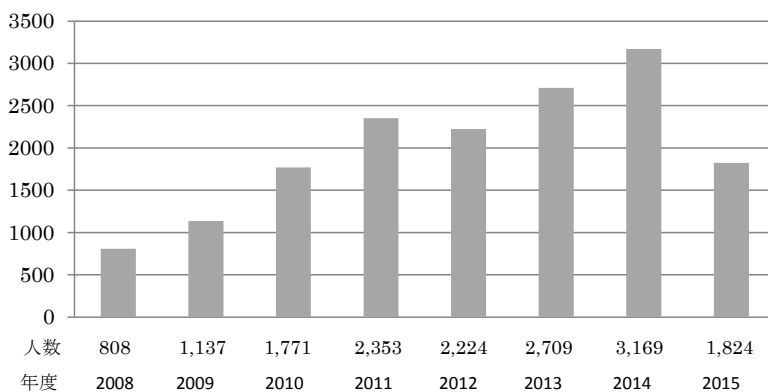


表3 2010～11年度月別見学者数

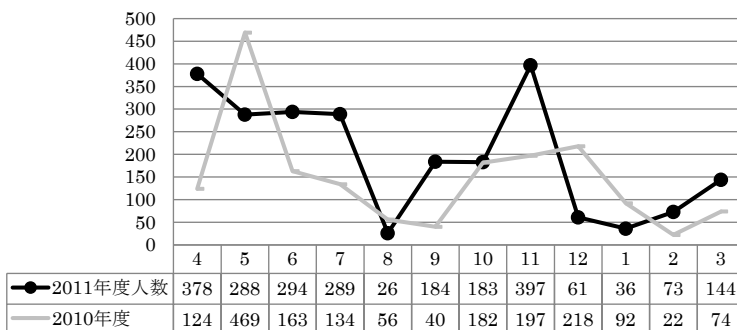


表4 2012～13年度 月別見学者数

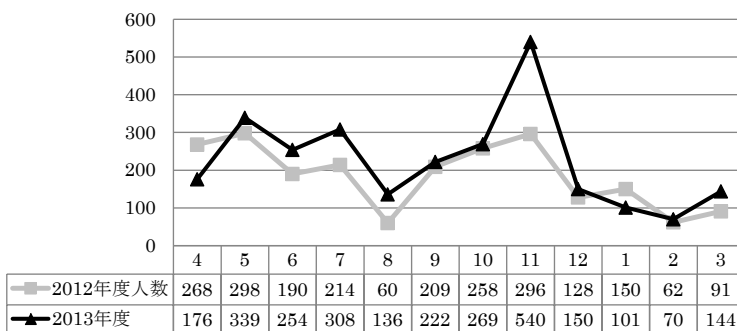


表5 2014～15年度 月別見学者数

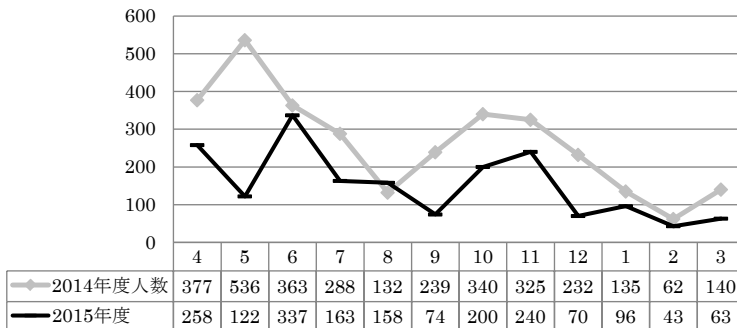


表6 2014年度開催イベントおよび月別見学者数

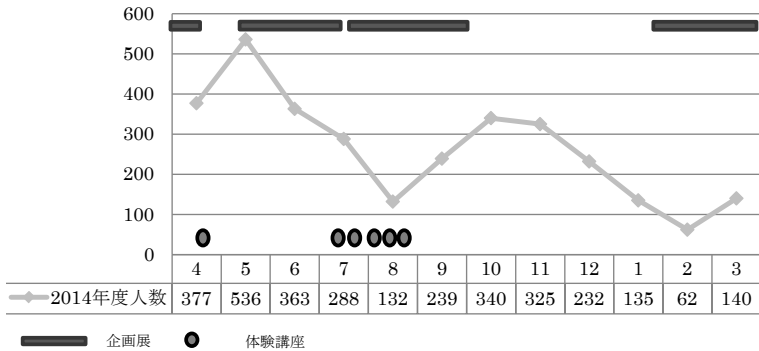


表7 2015年度開催イベントおよび月別見学者数

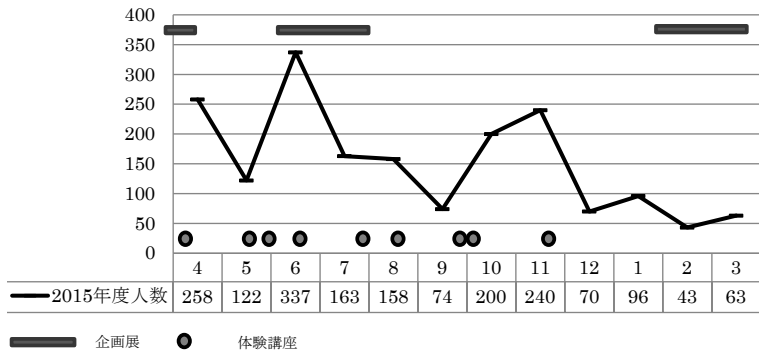


図4 展示室企画展（道北地区博物館等連絡協議会巡回展）
「樺太—知られざる北の国境」



図5 展示室企画展「オホーツクの灯り—安部洋子原画展」

[企画展や体験講座のポスター、チラシ]



図6 「サツダイのきのこ展」

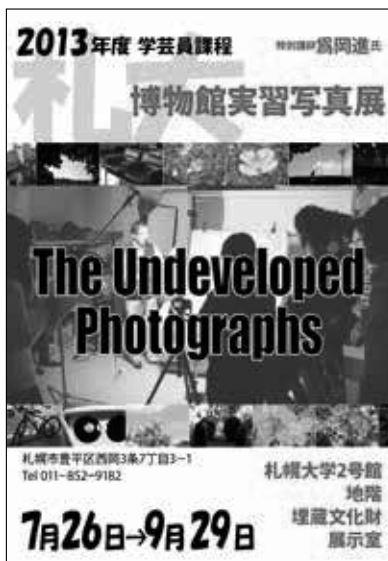


図7 「博物館実習写真展 The Undeveloped Photographs」



図8 「オホーツクの灯り—安部洋子原画展」

3. 地域連携に対する現状と課題

本節では、札幌大学における地域連携活動である「学外向け体験プログラム」（札幌大学入学センター、SUICC 事業）について展示室とのかかわりについて述べていく。

展示室では、本学の考古学研究成果や用地内の植生（北海道の植生）の特徴・魅力への再認識、いわゆる「気づき」を促すことを目的として、勾玉、ミニチュア土器、土笛、ガラス玉、透明樹脂標本、拓本の製作など、各種体験講座を行っている（表8および図9～11参照）。

表8 展示室で行われた体験講座一覧

期日	タイトル	内容	参加	主体
2010.6.15	縄文原体講習	縄文土器の縄目はどのような原体で施文されたのか	4	大学院生
2010.7.13	黒曜石製ナイフ形石器の製作実験	石器を過去の講座で出た剥片を利用し製作	4	
2010.7.30	縄文原体講習		4	大学院生
2010.8.3	拓本体験講座	凹凸の陰影を和紙に墨で写しとる方法を学ぶ	13	
2011.5.31	拓本講座		9	
2011.10.8	まがたま作り	柔らかい滑石で勾玉制作	8	
2011.12.10	粘土でミニ土偶づくり	はにわ用粘土で土偶作り	5	
2012.5.25	札大の森探検会	札大の森で見られる植物の観察会	5	
2012.9.27	透明樹脂で標本作り	植物標本を透明樹脂で封入し標本製作	4	
2012.10.1	透明樹脂で標本作り		4	
2012.10.2	ガラス玉づくり	ガラス棒を鉄芯に巻とりガラス玉を作る	3	北海道埋蔵文化財センター（以下、道埋文）
2012.10.25	まがたま作り		5	
2012.11.17	ガラス玉づくり		10	道埋文
2012.12.18	ガラス玉づくり		12	道埋文

2013.4.27	札大の森探検会		6	
2013.7.23	土器を洗おう		65	
2013.10.31	まがたま作り		5	
2013.2.15	ガラス玉づくり		2	
2014.4.23	まがたま作り		63	
2014.7.18	札大の森探検会		4	
2014.7.19	透明樹脂で標本作り		7	
2014.7.29	SUICC 夏休み小学生 工作会	キラキラコースター作り	24	SUICC
2014.8.3	拓本体験講座		3	
2014.8.8	拓本体験講座		5	
2015.6.3	まがたま作り		6	
2015.8.3	SUICC 夏休み小学 生工作会	土笛作り	21	SUICC
2015.10.4	オープンキャンパス 体験講座	まがたま作り	13	入学センター
2015.10.10	まがたま作り		6	
2015.11.28	ガラス玉づくり		4	



図9 「札大の森探検会」

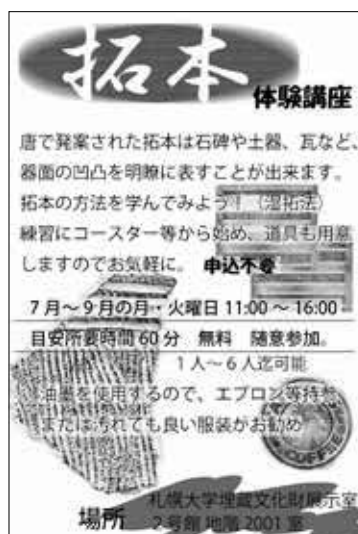


図10 「拓本体験講座」

また一方で、自校に対する誇りや愛情、帰属意識を楽しみながら育む目標のもと、基本的に本学志望の生徒・本学学生を対象とし、料金も（例外を除いて）無料としている。

以下、2015年度から行っている入学センター主催時の体験講座を例に挙げ、その取り組みを紹介する。



図 11 「まがたま作り」

(1) 「勾玉づくり体験」

1) 目的

本学と関わりが薄い古代の装飾品として名高い「勾玉」を製作するという体験型コンテンツを通じて、歴史文化への興味・関心を高め、より幅広い層に本学および学芸員課程、展示室へ対して理解を深めてもらうことを目的とする。

2) 内容

古墳時代にも用いられていた硬度の低い石材・滑石を簡易的に紙やすりで削る方法で、古代の装身具である「勾玉」を作るというワークショップである。オープンキャンパス特別企画として2016年05月14日（土）の14:00から15:00までの一時間を使って、道内の勾玉出土例の座学を含めた内容を行った。人目に付き易くまた開放感が出るよう図書館一階ロビーをお借りしたが、参加者は6名と2015年度のオープンキャンパス体験講座時に比べて少なく、内訳は高校生を主に保護者にも参加していた。

3) 学生ボランティア

参加者の主体となる高校生と共に、大学生も一員として製作体験を共に行い交流する環境がオープンキャンパスの企画として望ましく、本学の魅力を伝えるうえで効果的であると思われるため、博物館活動の研修の一つとして学芸員課程「博物館実習」履修生に講義の一環として協力いただいた。当コンテンツの開催には切り出した柱状の石をだまかに荒削りするこ

とをはじめとした準備工程が事前に必要であり、その段階にゼミ活動の一環として参加した学生も少なくなかった。

4) 評価

傾向としては希望する専攻との関わりでは生徒に偏重は見られず、市内在住者に少なく遠方から訪れた方に多いという傾向が見られ、そのような層へのワークショップ系の企画への潜在的需要が認められた。「今日一番楽しかった」「歴史のお話ができ嬉しかった」等、学芸員課程を受講している学生スタッフとの会話が高い満足度を得た結果に繋がったことがアンケートに表れていた。参加者の多かった2015年度は学生ボランティアを会場設営とチラシ配布・勧誘に分担したことが特別企画の周知に繋がったと推測できる（図12、13参照）。



図12 オープンキャンパス体験講座
「勾玉づくり」風景



図13 オープンキャンパス体験講座
「勾玉づくり」参加者

(2) ミニチュア土偶づくり体験

1) 目的

2016年08月07日（日）、10月02日（日）に行われたオープンキャンパス内の特別企画として、連続講座制をとったイベントの2回目。ミニチュア土偶に彩色するという体験型コンテンツを通じ、歴史の魅力を伝え、札幌大学および学芸員課程に対して理解を深めてもらうことを目的とする。

2) 内容

縄文時代の出土品に塗られた赤色顔料を想定し、古くから日本人に親しまれてきた顔料「ベンガラ」を用いて、1回目のイベントで製作した（補填で展示室が作ったミニ土器・ミニ土偶も含む）ミニチュア土偶に彩色するというワークショップである。道内を中心とした国内の土偶に関する座学を含め、14:00から一時間、図書館1階ロビーをお借りして行った。参加者は1回目8名、2回目9名で連続の申込は1名であった。

3) 学生ボランティア

参加者の主体となる高校生と共に、大学生も一員として製作体験を共に行い交流する環境を通じ、本学の魅力・雰囲気を楽しみやすく効果的に伝える事が期待できると、前回イベント時と同様に思われるため、博物館活動の研修の一つとして学芸員課程「博物館実習」履修生に講義の一環として協力いただいた。また今回は考古学を専攻する学生もゼミナール協力のもと参加が叶い、今後さまざまな専攻の学生やゼミナールとのイベントや企画など、活動を広げていく展望も視野に入れ期待していきたい。1回目の土偶づくりの後、彩色の前段階として焼成を行うにあたり実験的側面もあり職員のみで行ったが、野焼きのような本格的な内容ではなくとも土器焼成の実際としてイベント化を図れないか模索していきたい。

4) 評価

作業の難易度は高くないためか、歴史に関係する専攻を想定していない高校生も参加して頂き、交流を図る事が出来た。また、別のイベントに向かう方も「ベンガラ」の珍しさからか足を止めて見学される場面があった。高校生と積極的にゼミ合宿の体験談や普段の講義の様子を交えた会話を大学生が和やかに行っており、そのためアンケートでも非常に高評価いただいている（図14、15参照）。

この他の体験講座については表8、図16～18に示した。

いずれにせよ、展示内容と直接結びつくようなメニューから今後の見学に繋げることが望ましいが、勾玉や土笛のように、常設展示との関連性が薄いものもある。考古学ゼミナール履修者に過去行った石器や拓本製作体

験の目的である、製作実験および製作方法の習得とは異なり、体験イベントを楽しんでいただき歴史の面白さの導入に繋げる事も目的の一つとしているため、一応の達成はされていると言える。



図 14 オープンキャンパス体験講座
「ミニチュア土偶づくり」
焼成前の作品



図 15 オープンキャンパス体験講座
「ミニチュア土偶づくり」
完成品者



図 16 体験講座「まがたま作り」



図 17 体験講座「ガラス玉作り」



図 18 体験講座「透明樹脂標本作り」

一方、展示室には、一般的な登録博物館で行われているような市民主体の友の会やボランティア等は存在しない。そのため各種活動は学生の善意と協力に恃むところが大きいのだが、学びの実体験者である学生が主体であるからこそ、参加者に「楽しさ」を伝えやすいという利点もあるが、一方で学業を本分とするが故、どうしても活動には一定の制約（限界）が生じる。また各種団体との組織化・系統的な連携や活動がなかなか担えないため、広範囲・大規模な活動が難しい。「開かれた大学」として、これらをどう改善していくかは課題である。

4. 企画展展示

展示室で行われる企画展のなかには、学芸員課程で行われる博物館実習企画とリンクしながら行われるものもある。本節では、2015年度博物館実習企画展「手作りの記憶 新収蔵資料展」を例にとり、概要・経緯・展示構成などを紹介する。⁷⁾

(1) 2015年度博物館実習企画展「手作りの記憶 新収蔵資料展」の概要

会期 2015年1月23日～4月30日（82日間）

会場 札幌大学埋蔵文化財展示室（札幌大学2号館地階2003室）

料金 無料

入場者 432名

展示資料数 56点

(2) 開催概要と経緯

札幌大学埋蔵文化財展示室に寄贈いただいた資料を、本学生や市民の皆様に広く紹介する目的で計画された。外国の石器⁸⁾や、千島アイヌのテンキ（草かご）⁹⁾、陶製手りゅう弾¹⁰⁾など、人の手によって作られた物から過去の記憶をたどるという構成をとり、比較として常設展示の資料も一部使用した。

(3) 展示構成

会場入り口にて開催趣旨を「ごあいさつ」のパネルで説明し、展示配置図とA1サイズポスターを掲示した。4章立てで順路は自由とし展示した。1・2章は壁面の展示ケースに耐荷重性の高いピクチャーレールを新たに設置し、展示に利用した。章分けが明確になるよう、縦長の看板型見出しを製作した。

1) マリの石器

1980年代に、仕事でマリ共和国を訪れた寄贈者本人によって表採された打製石器のうち、石鎌21点を展示した。隣には、札幌市近隣市町村で表採された石鎌10点を並べ、場所は違えども用途に沿って人の手で作られた矢じりの形を比較展示した。

また、石器の加工をイメージし易いよう黒曜石の原石と剥片も配置し、石器とは何か、石器の製作とはどのようなものかを解説するパネルを3点製作している。マリ共和国の解説として、地図、歴史・文化・地理・産業等の概要と地図をパネルにした。

2) 学長コレクション

桑原真人学長からの寄贈資料のうち、札幌を中心とした北海道の近・現代史に関わる資料15点、複製2点を展示した。碁盤の目状の札幌市街が区画されはじめた、明治6年の札幌市地図を拡大複製し、明治22年、平成の物と比較して展示、太平洋戦争頃の写真帳や紙芝居型の広告も並べ、当時の様子と時代の流れを表した。偉人を顕彰する石碑などの拓本には、和紙の強度と大きさを考慮し、額を自製している。関連事項と碑文の内容を解説するパネルを製作した。

また、本学の学長の人柄を示すような趣味のコレクション、略歴を、新入生に紹介する意図も含めパネル化し展示した。

3) 千島アイヌのテンキ

常設展示に使用していたテンキ（草かご）を、千島アイヌの歴史に焦点を当てた解説を新たに作製して展示した。戦後、千島アイヌの女性が千島で採取していたテンキ草（和名ハマニンニク イネ科の多年草）を用いて

作った物として、寄贈者に記憶されている。3章を手がけた学生から借用する形で、道内で採取された素材のテンキ草も洗浄前、処理後の2点展示した。

4) 陶製手りゅう弾

陶製手りゅう弾は、太平洋戦争末期に、物資不足のあおりを受け開発された球状の陶器（陶製手りゅう弾）の破片である。戦後、殻であるそれらが廃棄され、後に寄贈者によって収集された。資料の概要のほか、関係すると思われる日本各地の陶器についての解説パネルも展示した。

(4) 活動報告

2015年度の学芸員課程企画展で扱った資料は整理作業途中の物も多く、半期で企画を完遂させる上で、時間の足りない、手の足りない場面は多かったように見えた。また寄贈された物という以外関連性が薄い展示品に、ストーリー性、テーマを後から付与するといった点も拍車をかけていた。展示企画の選定にあたって外部からの借用も視野に入れているが、展示室が収蔵する資料の把握、知識、設備や備品の情報共有の深化が、いくらかその解消に繋がると思われる。一方、資料台帳や設備に関するデータは、自由閲覧としていたり班毎にコピーを配布していたりしたが、それら配布資料の意味や活用の仕方をより強く説明していく必要がある。より解りやすく配布資料を改定する等、改善していきたい。

(5) 今後の課題

上記の展示に関して言うならば、授業内で広報を広範かつ十分な形で行えなかった点が一番の問題であった。実習（授業）の一環という位置づけと展示室における企画という、いわば両義性を有する展示であるがゆえの課題であるともいえる。しかしポスター・チラシから何を意図する展示なのか伝わってこなかった、という意見を見学者から頂いている。（図19参照）非常に重要な指摘というべきであろう。今後は、広報物を作製するための助言も適切な形で行っていきたい。

一方、埋蔵文化財展示室の事業として企画展示を行う際、時間と人手の

確保はいつも悩まされる問題である。展示室でも協力は惜しまないが、博物館実習のプロジェクトにどの程度手をはさむかの加減も、毎年の事ながら難しい課題である。さらなる充実した実習内容の一助となるよう、今後も検討を重ねていきたい。



図 19 2015 年度博物館実習履修生によるポスター

5. 札幌大学史の展示

(1) 大学史展示の経緯

2012 年、札幌大学は来るべき開学 50 周年を見据え「50 年史編纂プロジェクト」を発足させ、大学史関係資料の調査・収集などを開始した。大学に関する各種資料を収集・整理しながら、大学史の本格的な編纂作業および公開に向けて準備をすすめてきた。

こうした状況において 2015 年、同プロジェクトは発展的に解消し、代わっ

て「札幌大学史編纂専門委員会」が正式に発足をみる。大学史に関する高度な知見と専門性を有するメンバーで構成された同委員会によって、大学史研究と展示にむけた各種作業は急激に加速する。2016年には札幌大学2号館地下に、収集資料や研究成果を公開展示するスペースを設けた（図20～22参照）。

近々に設けられる常設展示施設の本格稼働に向けた準備をすすめている。本節では、これまでの大学史に関する経緯を簡単に踏まえながら、現在の展示について概要を伝える。



図20 大学史展示 南側



図21 大学史展示 北側



図22 大学史展示 北側壁面

(2) 展示構成と今後の課題

札幌大学の開学前後から現在に至るまでの50年を、時系列に展示しながら、その時期における講義風景、文科系・体育会系サークル等の活動実績、大学祭等の各種行事やイベント等を紹介しながら、多面的に大学の歴史が理解できるような構成にしている。パネル展示のほか、大学が所蔵する資料のほか、大学関係者から寄贈を受けた現物資料なども併せて公開している。

今後の本格稼働にむけて、展示室での常設や企画展示の例から考え、展示ケースや、展示ごとに移動し順路を変更できる壁面（パーティションな

ど)、パネル、照明設備など、幅広い展開を行えるよう考慮しておくことが重要である。通路の余裕をとり閉塞感を少なくするのは勿論のこと、室内の資料配置や直線的直角的すぎる順路を避け、変則的に辿っていくことで刺激を生み、退屈に至りかねない印象を払拭するためである。

常設展示は施設の基本理念を移した、企画展示に比べて長期にわたる展示内容と位置づけられるのが常である。展示室のように空間の広さの上で制約があり、企画展の際は常設展示を撤去し設備も既存のものを使用する施設規模の場合、職員のアイデアと工夫で新しい情報提示の方法を柔軟に模索していけるよう図ることが重要である。

一般見学者はもとより現役学生からの評判は上々である、自校史を学び、自らが学ぶ大学の歴史を知ることは「大学の共同体の一員」という帰属意識を高める効果がある。そうした観点からいえば、教育的効果もきわめて高い。

一方、上述のように札幌大学における大学史研究はまだ発足して日も浅いため、展示内容という観点からいえば、まだまだ不十分である。質量どちらも一層の充実が、今後の重要な課題である。

おわりに 一地域のミュージアムとしてのこれから

2016年現在、札幌市豊平区西岡地区におけるミュージアムは札幌大学埋蔵文化財展示室があるのみである。そのため近隣小学校や地域の諸団体から、社会教育施設として見学の申し出を受ける機会も多い。(図23参照)

見学予約や来室時における会話(質問や雑談等)からは、「西岡の歴史をふり返る場として一特に小学校では社会科見学で北海道や西岡の先史時代を学べる場として一展示室を利用したい、またそのような展示内容を期待」しているという傾向が見て取れる。

また、これまで展示室においては①広い意味での「市民」(札幌市民、北海道民、国民、外国の方々)全般を射程とするもの、②(札幌大学)在学生、卒業生に向けたもの、③(豊平区西岡・福住・平岸・澄川など)地域の住民に向けた展示、をおこなってきた。共通して言えることは、皆一

様に、大学ミュージアムに対する期待である。これらは見学者との会話や来館者アンケートから表面化してきた需要を基にしたものであるが、展示室においてもそうした声にも応えるべく、さまざまな活動を行ってきた(行おうと努めてきた)。



図 23 近隣小学校との関わり(社会科見学)

高度情報社会である現在において、一般市民の学習意欲の多様化と高度化・複雑化は顕著であり、そうした地域社会の変化に対応することは、地域の博物館にとってますます求められる役割である。一方、高等教育機関として、さまざまな研究・教養「資本」を有している大学は、そうした市民のニーズにきわめて対応しやすい組織である。

そうした意味からも、これまでの展示はもちろん、近年、取り組み始めている自校史展示は、地域の発展とともに歩んできた本学の自校史を展示しながら、地域の歴史を同時に語るものであり、非常に好評を博していることは、将来に向けた大きな希望である。

自校史を自校の歴史という狭い観点にとどめるのではなく、地域における郷土史の一面として位置づけることが地域への貢献となることも改めて確認できたことはきわめて重要である。

以上を踏まえ、今後の大学博物館は、既存の需要を取り上げて提供するだけでなく、地域社会と一体となって共に価値を創造する、いわば「共創型」の取り組みを主題としていくべきであろう。このように大学博物館は、地域共生社会を実現するうえで、非常に多くの可能性を秘めているのである。

参考文献

- 伊能秀明（監修）『大学博物館事典—市民に開かれた知とアートのミュージアム—』（日外アソシエーツ、2007）
- 金山喜昭「公立博物館はどのように変わったか—「日本の博物館総合調査」の分析結果より—」『法政大学資格課程年報』Vol.5（法政大学、2015）
- 君塚仁彦・名児耶明（編）『現代に生きる博物館』（有斐閣、2012）
- 札幌大学学芸員課程『札幌大学[学芸員課程年報]』第14集（札幌大学、2015）
- 高橋修「小学生向け古文書解説プログラム開発の意義と効果」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第17号（日本ミュージアム・マネジメント学会、2013）
- 平井宏典「共創概念に基づく博物館経営の考察」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第17号（日本ミュージアム・マネジメント学会、2013）
- K. Mclean 著、井島真知・芦谷美奈子訳『博物館を見せる一人々のための展示プランニング』（玉川大学出版部、2003）

引用写真

- 札幌大学職員撮影 オープンキャンパス体験講座「勾玉づくり」風景（図12）
- 本学学生撮影 近隣小学校との関わり（社会科見学）（図23）

注

- 1) 1989年4月14日開室。札幌第一高校西岡寮であった建物を札幌大学（以下、本学）が1979年に取得した5号館に、研究所や資料室などのほか、札幌大学埋蔵文化財展示室が設けられた。かつて図書館南側にあったが老朽化のため建物の取り壊しが決まり、2008年から移転準備を行う。博物館実習の講義の一部として資料の搬出入を学芸員課程にご協力いただきながら完遂し、2009年8月2日から2号館地階（元2003教室）にて本格的に展示公開を再開する。2010年1月15日に常設展示のリニューアルオープンを果たした。
- 2) 本学には開学期から江上波夫をはじめとする考古学者が在籍しており、展示室の前身ともいえる基盤を作っていた。現在の収蔵資料の中心は、擦文土器編年で大きな功績を残し、著書『アイヌ文化の源流を探る』など精力的な研究活動を行った石附喜三男（1939～1986年）の調査による道内各時代の発掘調

査出土品や表採品、本学教員や学生、市民の皆様からの寄贈資料から構成されている。特に移転後は埋蔵文化財以外の文化財にも積極的に寄贈受入を図る姿勢をとり、企画展示や調査研究対象のバリエーションが増えた事により活動に幅が生まれているといえる。

- 3) ICOM (International Council of Museums ; 国際博物館会議) により承認された「ICOM 規約 (2007年8月改訂版) 第3条 用語の定義 第1項 博物館」より引用。
- 4) 博物館法において、登録博物館、博物館相当施設、根拠規定はなく法律上の博物館ではない博物館類似施設、この3種類に国内の博物館を分類している。
- 5) 展示室移転のため常設展を展示公開の中心とした2009～2010年における利用実績から算出した。他大学博物館の年報報告と比較してこの規模の施設では少なくない数といえるが、2013年や2014年の入館者数を考えると企画展に関連を見出したい。博物館園において、利用者への丁寧な解説が再び足を運んでいただく呼び水になるといわれており、筆者の経験上からもリピーター獲得に繋がっていると感じている。地域の皆様や学生のより一層の展示室利用のため、企画展と体験講座を両立させる事は課題の一つである。
- 6) 君塚・名見耶 (2012) ほか。
- 7) 札幌大学 学芸員課程 (2015) に加筆。
- 8) マリ共和国のキダルにおいて表採された、石鏃をはじめとする打製石器を中心に2012年15点、2013年30点、2015年13点が展示室へ寄贈された。道内にマリ共和国の石器を展示している博物館園はほぼ無く貴重である。これらまとまった石器コレクションは今後さらなる活用を図ってきたい。
- 9) テンキ草で作られた編みかご。現存するものは少なく非常に貴重である。2014年に展示室へ寄贈されたものはサイズ9.55×6.5×2.7cm、長方形の小箱型である。
- 10) 太平洋戦争時、旧日本軍が陶器の生産地に作らせたもので、戦時中の状況を伝える貴重な資料である。この陶器製手りゅう弾の破片12点が2013年に寄贈された。